

中央水研ニュース No.35

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2001322

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-ShareAlike 4.0 International License.



■ 外国出張報告

中央水研ニュースNo.35（2005. 平成17年3月発行）掲載

「第5回魚類の内分泌に関する
国際シンポジウム」に参加して

清水 昭男(資源評価部 生理特性研究室)

要 旨

[中央水研ニュース目次へ](#)[No.35トップページへ](#)[中央水産研究所
日本語トップページへ](#)

写真1



写真2

要 旨

2004年9月5日から9日にかけて、スペインのカステリオンで開催された表記シンポジウムに参加してきましたので、その印象をご紹介します。このシンポジウムはほぼ4年ごとに世界の各地で開催されているもので、北海道大学水産学部が中心となって函館で開かれたこともあります（前々回、1996年）。

カステリオンはオレンジで有名なバレンシアの少し北にある地中海沿岸の町で、あちこちにブーゲンビレアや極楽鳥花が地植えしており、南九州や沖縄並に暖かな気候であると思われますが、緯度で言うところ北緯40度、日本で言えば盛岡と八戸の間に相当するわけで、いかに地中海沿岸が温暖なところであるかがわかります。スペインは料理がおいしいということも聞いていたので、そのことも楽しみにしていました。

ここで私は、「Gonadotropins and Gonadotrophs in the Mummichog and Other Acanthopterygian Fishes」（棘鰭上目魚類の生殖腺刺激ホルモンとその分泌細胞）というタイトルでポスター発表を行いました。（[写真1](#)、[写真2](#)）

[本文へ >>](#)nrifs-info@ml.affrc.go.jp

(c) Copyright National Research Institute of Fisheries Science, Fisheries Research Agency All rights reserved.

写真1



☒ CLOSE

写真2



☒ CLOSE

「第5回魚類の内分泌に関する国際シンポジウム」に参加して



清水 昭男(資源評価部 生理特性研究室)

1. バレンシアとカステリョンの町

- ④ 中央水研ニュース目次へ
- ④ No.35トップページへ
- ④ 中央水産研究所日本語トップページへ

1. バレンシアとカステリョンの町

今回のシンポジウムはInstitute of Aquaculture Torre de Sal、Spanish Council for Scientific Research、及びIberian Association of Comparative Endocrinologyの共催で、Jaume I大学のキャストロンキャンパスで開かれました。カステリョンは大学の他には観光名所等の特筆すべきところは何もないような町で、日本で手に入るガイドブック類を見てもほとんど情報が得られません。もちろん日本からの直通航空便もないので、パリ経由でバレンシアまで飛行機で行き、そこから電車でカステリョンに向かうことにしました。途中の飛行機で内水面利用部の生田博士を見つけ、彼も同じホテルに泊まる予定だということでこれ幸いと以後行動を共にすることにしました。

バレンシアで少々時間があつたので彼と一緒に市内観光をすることにし、大聖堂や中央市場を見学することにしました。さすがはかつての最強国の一つ、しかもカトリックの国と言うこともあって、バレンシアのような中都市でも大聖堂は大変立派なものでした。（写真3）

中央市場も大変活気があって面白いところでした。やはり興味をそそられるのは魚市場で、日本以上に魚類の種類が豊富なのに驚きました。タイ（ヨーロッパヘダイ）、カツオマグロ類、カンパチ、サバ、イワシ類、ヒラメカレイ類

（ターボット等）、スズキ類（European seabass）、タラ類（Hake等）、ボラ等の一般的な魚から、エイ、ヒメジ、アンコウ、マテ貝、シャコ等のやや特殊な魚介類、さらにはカナガシラ、ミシマオコゼ、アカタチ、カメノテ、カラッパ等、どうやって料理するのだろうと思うものまで色々ありました。（写真4、写真5、写真6、写真7、写真8、写真9）イカ類も日本のソデイカに匹敵するような巨大なものからホタルイカ程度しかない小さなものまで様々であり、タコも何種類か置いてあって、このあたりで魚介類が大変好まれていることが良く分かります。チーズやハム、ソーセージなど畜産物の種類も豊富でしたが、どこの店でも生ハムの巨大な塊を何本と、時には何十本もつるしてあるのと、（写真10）ウサギをよく食べるようで、皮をむかれ、肝臓以外の内臓を除いたウサギが何匹も置かれているのが印象的でした。

カステリョンまではちょうど日本の横須賀線に相当するような中距離電車に乗り（写真11）、約1時間で到着しました。この町自体は小さなもので、町の中心部の概容概要？などは生田博士としばらく町歩きをしている間に覚えてしまいました。スペインもマドリッド等の大都市は治安が悪いらしく、バルセロナ経由で来た人も



写真4



写真5



写真6



写真7



写真3



写真8



写真9

危ない目に遭いそうになったということですが、バレンシアやカステリオンはいたってのんびりしたところでラテン風の気楽さにあふれており、生田博士も「老後はスペインで暮らそうか」などと言っていました。



写真10



写真11

2. シンポジウムの内容

さて、本題のシンポジウムについてですが、参加者が大変多く（360人）、特にヨーロッパの若い人の参加が非常に多かったことが挙げられます。これはやはり地の利によるものでしょう。そのために全体での発表数は 317に対してポスター発表がこの種のシンポジウムとしては異常と思えるほど 多く（235題）、全部見て歩くのはかなりの苦痛を伴いました。ポスターは大部分が大判プリンターで直接印刷されており、デザインも大変凝ったものが多かったのですが、背景デザインに凝りすぎて文字が大変見づらいものや縦長のスペースに無理やり横長のポスターを押し込んだ代物も多く（写真12）、見映え最優先の風潮にはいささか疑問も感じました。日本人の参加者はそれほど多くなく、水研センターの研究者としては、私と生田博士の他は同じく内水面利用部の矢田博士、北水研の安藤博士、養殖研の玄、伊藤の両博士とそこそこの参加者がいましたが、大学関係の人達がやや少ないようで、来年ボストンで開かれる「国際比較内分泌学会」にターゲットをしばっているのではないかと話していました。



写真12



写真13



写真14

シンポジウムの内容ですが、一口に魚類内分泌学と言っても、内分泌学自信身の範囲が非常に広がっているということもあって大変幅の広いもので、全体を簡単に紹介するのは難しいのですが、パートとしては、内分泌系の発生学と遺伝学、神経内分泌学、生殖内分泌学、成長と代謝、ストレス及び免疫と内分泌系、ホメオスタシス、人間活動と環境因子が内分泌系に及ぼす影響、魚類内分泌学の増養殖への応用、魚類内分泌学における新規手法の9つの分野に分かれていました。中でも発表の多かったのは生殖内分泌であり、次いで成長と代謝でした。私の発表も生殖内分泌の分野で、様々な魚類における濾胞刺激ホルモン分泌細胞（FSH細胞）及び黄体形成ホルモン分泌細胞（LH細胞）の同定と、マミチョグにおけるFSH及びLHの精製とを紹介しました。（写真13）色々な魚の写真入りのポスターはなかなか（楽しいと）好評で、配布用のミニポスターも60枚用意したのですが全部売り切れてしまいました。また、ユトレヒト大学でアフリカナマズのFSHとLHを研究しているSchulz先生も興味を持ってくださり、後日、私の手持ちの抗血清を提供して共同研究を行う話もまとまりました。

シンポジウム全体としてはかなりのハードスケジュールで、連日朝8時半から夜の7時前後までOralまたはポスター発表が続き、途中のエクスカージョンも半日のみ（バレンシアの水族館、写真14）と言うものでしたが、2日目の夜にはCultural

eveningと称してコンサート観賞があったのもいかにもヨーロッパらしいものでした。

ベストポスター賞に輝いたのは北大出身の後藤-風藤理恵さん達のグループ（彼女自身は欠席でしたが）でした。おしくも賞は逃しましたが、当水研の生田博士のプレゼンテーション「The Effects of Estrogenic Endocrine Disruptors on Male Reproductive Behavior in Masu Salmon *Oncorhynchus masou*」（雌性ホルモン類似内分泌攪乱物質がヤマメ雄魚の生殖行動に及ぼす影響）がベストポスター候補にノミネートされたことも紹介します。

帰りも同じくバレンシアまで電車に出て、パリ経由で成田まで戻ってきましたが、バレンシア発の飛行機の時間が早く、大変早起きをしたうえ、パリでの 乗り 継ぎが時間的に非常に厳しくてかなり疲れました。しかし、食事も予想 通りなかなかおいしかったし、スペインの良さを感じさせ、内容ともども充実 したシンポジウムだったと思います。次回はやはり4年後、カナダのカルガリで開かれるそうです。

[<< 要旨へ](#)[ページのTOPへ](#)

nrifs-info@ml.affrc.go.jp

(c) Copyright National Research Institute of Fisheries Science, Fisheries Research Agency All rights reserved.

写真3



☒ CLOSE

写真4



☒ CLOSE

写真5



☒ CLOSE

写真6



☒ CLOSE

写真7



☒ CLOSE

写真8



☒ CLOSE

写真9



☒ CLOSE

写真10



☒ CLOSE

写真11



☒ CLOSE

写真12

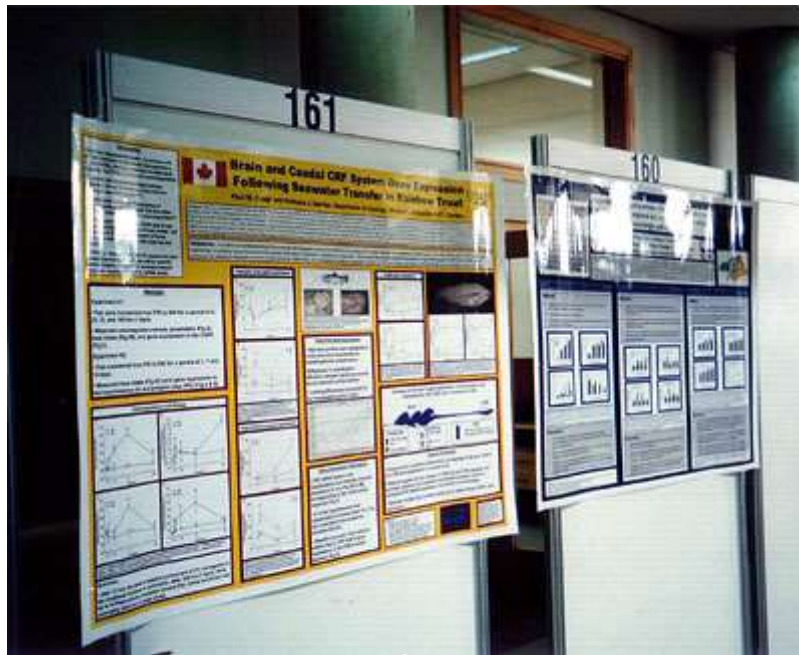
☒ CLOSE

写真13

☒ CLOSE

写真14



☒ CLOSE